

それがそのまま、ミイラになつて行くやうにも見えませんでした。父の双の腫、それもやつぱり露に結ばれてゐました。

柩の列がしめやかに

雨を縫ふて

黒き沈黙の人々は私しの家を

幻の如く出でて行く

それは丁度今日のやうな日でした。

列が一廻して見えなくなつた後は、強い〜雨となりました、その時私は母の膝に凭たれて、雨の音に耳を借しながら佛前の灯に腫を輝かしてゐました。然し何故かおのゝいてゐました。

ほんちに私は佛壇の灯が淋しくそら怖わかつたのです。

それでも母が灯をつけ替えて鐘をカーンと一つ鳴らす時は、そのいつまでも〜ひびいてゐる音律に耳を澄すのでした。

するとそれが遠い妹の所へまで聞へて返事が来るやうな感じがしました。

だからいまか〜と待つてゐました。

それは毎日〜鐘をならす度毎、

その時の後姿がウツトリと夢のやうに浮かんで來ました。私はその時はまだ死と言ふものがよく解してゐなかつたのです。

そりや初めて、有つたからです。

このあどけない私を母は見てどんなにか泣いた事でした。

あゝ物語りのヒロインは今宵いづこの空に!!

雨は又一頻り強く降り出して來ました。

ここ〜と間早やに打つ雨垂の高いひゃきが私しの新にこみ上げしかなしみは熱い涙を誘つて止度なく

そうして白紙に型を落しました。

それが二つ三つしみぬきのやうに廣くちりました。

見はてぬ夢を追ふごと恍惚と涙さしぐみし腫をはるか、山亦山を見渡した時餘波をたゝへた鐘の音が夕靄の奥からゴーンと響きわたるのでした。

寂 寥

安息の胸に手をおき

秦 觀 行

大地はまさに眠らんとす

あゝ空のはてに

夕焼はなづみつ

永遠のたましゐぞよりそひ

黙せる鳥、二羽

コバルトは優しくなげきぬ。

○ 夕暮の雲は眞赤に

釣する子等は夕焼を唄ひ

山寺の鐘は遠くく響き渡り

案山子は黙し

鳴子は風幽に渡り

鳥は一聲鳴きて飛去る

○ 「寂寥」はまた來りぬ

しづかなる

夕暮をしたひて

寂寥はまた秋に來たりぬ

あゝ鳥の瞳にも

我が蒼ざめし顔のうつるや。

○ 行きくれし

曠野の果の野の果の

青い星にてらされて

枯枝になく旅がらす

郊外の夕

秋 永 露 翠

汽笛が鳴る

ものすごい鐵のドアが開かれる、

ごよめきの聲

蠢動の響

労働につかれた一群がはき出されてゆく、

けたましい音と共に

あざけるやうに

オートモービルが走る、

そのガソリンの臭氣の中から

繩ノレンの燈火が

力なげに黄い人ごみを照して居る。